



巴 ともえ

千夜賀風薪能

日本の伝統文化の「原体験」を。

仕舞 「高砂」小早川 泰輝
「経正」小早川 康充
狂言 「仏師」大藏 基誠
半能 「巴」武田 宗典

プログラム

- 清談茶会 14:00
(※ 別料金・要予約)
- 箏のしらべ体験 14:30
- 静謐の箏曲 16:00
薙刀・日本刀×能
- 四方碓いの儀 16:40
— 再入場 —
- 宵の箏曲 17:10
墨ライブペイント
- 阿吽の龍 17:40
墨絵×能×茶
- 月天茶会 17:55
- 薩摩琵琶「敦盛」 18:10
- 狂言・能 仕舞「高砂」「経正」 18:40
- 狂言「仏師」
- 薪能「巴」

日時 令和7(2025)年
9月28日(日)
14時00分～20時00分
※ 17:00に一度ご退場のうえ再入場となります。
(阿佐ヶ谷神明宮は17:00まで一般参拝可)

場所 阿佐ヶ谷神明宮
東京都杉並区阿佐谷北1-25-5

鑑賞料 特別席(大人) 12,000円
正面前方席確約・グッズ・撮影特典付
指定席(一般) 7,000円
自由席(一般) 5,000円
小・中学生 1,000円
※ 上記はすべて17:00以降の演目観覧料金です。

武田宗典ホームページ
チケット販売窓口
6月29日より販売開始



チケット販売サイト:
https://takedamunenori.com/ticket-other/
チケットお問合せ: munenori.noh@gmail.com
※ 雨天時、中止の場合は上記チケット販売サイトにてお知らせ致します。

【主催】 千夜賀風、武田宗典 【お問合せ】 contact@senya-gafu.com

写真提供: 前島 吉裕

能楽師の手で灯す、今に還る薪能

— 能楽師主催による、時代を超える薪能『千夜賀風薪能』 —

[主催] 親世流能楽師
武田 宗典
TAKEDA MUNENORI

能・狂言



能楽師シテ方親世流。重要無形文化財総合指定保持者。暁星高校～早稲田大学第一文学部演劇専修卒。一般社団法人親世会理事。武田宗和の長男。父及び二十六世親世宗家・親世清和に師事。2歳11か月で初舞台、10歳で初シテ(主役)、以後、「石橋」「乱」「道成寺」「望月」「翁」「安宅」等を抜く。海外公演多数。アメリカ公演・英国公演では出演だけでなく、その企画・プロデュース。芸団協・東京アート&ライブシティ主催の能とクラシック音楽のコラボレーション公演、「はごろも～銀座の飛翔」・「ADACHIGAHARA～銀座の地下に鬼が棲む」 「天鼓 I love Music」において主演。2021年9月、一般社団法人EXTRAD主催公演において、試作能「桃太郎」を製作・主演。国内では年間100公演程の舞台の他、「謡サロン」を始めとした能楽のレクチャー型講座を、社会人向け・学生向け・子供向け・外国人向け・オンラインなど様々なスタイルで、全国各地で50回程開催。その活動は、フジテレビ系「One hour sense」・テレビ東京系「東京交差点」・J-WAVE「TIME AND TIDE」など、多くのメディアでも取り上げられている。Instagram・Facebook等での発信も多く、週1回インスタライブを定期開催。



墨絵師
阿部 朱華羅
ABE SCARA

墨絵



地平天成を祈り日本古来からの美と魂×宇宙/自然を表現するアーティスト。幼い頃から森羅万象の声を感じ絵霊を描きつくる。学生の時、国際コンクールにて6千点を超える応募者から作品『龍王』が受賞し日本代表作品に選出されルーブル美術館内で12ヶ国の代表作品と共に世界大会に出場。以降、フランス、アメリカ、フィンランド、スペイン等、世界各国で受賞・招待展示多数。フランスSalon d'Automne連続入選。2024年パリにて個展開催。多くの書籍に掲載されパリ・アート誌にて「煌めく美の魂」と称される。国内では能舞台絵や神社仏閣の壁画制作、映画グッズにも携わる。また、自身の作品を身に纏い国内外の美術館や能楽堂、神社仏閣で天地の平安を祈り舞い描く独自のライブペイントをおこなう。2025年アメリカサルバドル・タリ美術館にてアジア人初のアート・パフォーマンス『SCARA花鳥風月』ショー開催。養老孟司氏が代表理事の一般社団法人「養老の森」にて森と人を日本文化で繋ぐ「ツナグの森プロジェクト」主宰。大学などで非常勤講師国内外でワークショップもおこなう。
■instagram: @scara_cetidesign



鶴田流薩摩琵琶奏者
馬場 一嘉
BABA KAZUYOSHI

琵琶



鶴田流薩摩琵琶奏者 俳優。雨月ノ衆座員。日本琵琶楽協会会員。1996年中央大学総合政策学部政策科学科を中退し、デボラ・アン・ディスノー氏主催のクレインリバーワークショップで俳優としての基礎を学ぶ。舞台、映画、CMなどで俳優として活動した後、2004年一般企業への就職に伴い舞台活動を休止。同年、祖父馬場鶴洲の琵琶を継承し岩佐鶴文氏に師事。生前祖父の得意としていた『龍の口』をはじめ『俊寛』『耳切れ芳一』『分福茶釜』『福原落』『湖水棄切』『鉢の木』『壇の浦』などの古典弾き語りのほか、ダンサー、書家、剣士、語りなどのパフォーマーと共演し活動の場を広げている。2011年、2017年、2021年、日本琵琶楽コンクール入賞。2023年、2024年、舞台「やむにやまれぬ蒼」西郷隆盛役で出演。



[主催]
千夜賀風
SENYA - GAFU

刀・薙刀



「旧きに倣い、今に還る」を理念に、日本刀や武士文化を軸とした体験型の文化プロデュースやサービスを展開しています。神社仏閣などの聖なる空間においては、単なる体験の提供にとどまらず、その土地に息づく物語や歴史、武士が育んだ品性や精神性、さらには彼らが嗜んだ多様な文化・芸術への理解を深めることを目的に、日本の伝統文化の魅力を再発見する機会を提供しています。これらの活動と並行して、日本文化の精神性と芸術性が結晶する伝統芸能「薪能」を、五感で体感する特別な文化空間として再構築する「薪能プロジェクト」を展開。体験設計の知見と伝統芸能のネットワークを活かし、地域ごとの風土や歴史、神仏の気配を取り入れながら全国各地で薪能を開催し、子どもたちに「日本の伝統文化の原体験」を届けることで、伝統文化の継承と地域活性化の両立を目指す文化事業として取り組んでいます。



生田流箏奏者

箏アンサンブル十色
KOTO ENSEMBLE TOIRO

箏



東京藝術大学邦楽科箏曲生田流専攻を卒業し、若手演奏家として活動している同期生によって2020年に結成。「という」には「十人十色」の意味をかけ、メンバーそれぞれの"音"の個性を大切に演奏すること、そして伝統的な曲から新しい曲を通して、箏・十七絃・三味線が魅せるたくさんの"色"を届けたいとの想いから名付けた。プロとして全国各地で演奏経験を持つメンバー個々の実力と、同期生ならではのアンサンブル力を強みとする。日本の伝統音楽である箏の魅力や、様々な企画を通して幅広い世代へ伝えることを目指す。これまでにホールコンサートや奉納演奏、ワークショップ、日本画とのコラボ動画の制作などの活動を行なう。



茶人・自然農藝家
忌部 孔人
INBE MICHIHITO

茶道



茶人・自然農藝家
茶の湯に込められた思いと美しさを、流派や形式にとらわれず、自然・季節の移ろい、不完全さを尊びながら表現している。産土の恵みを受けながら、神事等で使われる麻製品、また霊草・真菰や在来茶の農園を営み、日々の暮らしを彩る品々まで、一つひとつ手仕事で丁寧に紡ぎ出し提供している。瞑想指導者として起業者、アスリート、医師、著名人といった様々なフィールドのプロフェッショナルから厚い信頼を集めている、ただ御縁ある方のみ完全紹介制で行っている。

【清談茶会について】
開始時間: 14:00～(随時入場)
料金: 3,000円(お茶・お菓子付き)
※ 清談茶会のみ参加も可能です

清談茶会のご予約はこちら



千夜賀風薪能

神々が宿る鎮守の柱に篝火が灯り、幻想的な空間に能・狂言・箏・琵琶・抜刀演武・墨絵・茶会が響き合う一夜限りの舞台が広がります。古より続く日本の美と祈りを、現代に生きる私たちの感覚に寄り添うかたちでお届けします。プログラムは、心を鎮める「清談茶会」に始まり、若き演奏家による箏アンサンブルの音色、千夜賀風による抜刀演武、墨絵のライブパフォーマンス、琵琶の弾き語り、そして薪能「巴」へと流れていきます。静けさと炎に包まれながら、五感を通して日本の伝統文化をご堪能いただけます。能は古来、武家や庶民の暮らしに根ざし、人々の心を癒し、励ます芸能として親しまれてきました。しかし現代では「敷居が高い」「特別な人のためのもの」と思われがちです。私たちはその本来の姿を取り戻し、能をより身近に、生活に寄り添う文化として蘇らせたいと考えています。能楽師自らが主催に立ち上がる薪能は今回が初の試みであり、本公演がその第一歩となります。

14:00

清談茶会

茶師 忌部 孔人
自然農藝家

14:30

箏のしらべ体験

箏アンサンブル十色
柿原 千紘
藤重 奈那子
町田 夢子
山脇 貴久恵

16:00

静謐の箏曲

箏アンサンブル十色
柿原 千紘
藤重 奈那子
町田 夢子
山脇 貴久恵

16:40頃

四方被いの儀

千夜賀風
静形薙刀 桐生 園子
巴形薙刀 内藤 早紀
兒玉 龍空
境野 睦子
船橋 由多嘉
塩野 晃央
桐生 園子

17:10頃

宵の箏曲

箏アンサンブル十色
柿原 千紘
藤重 奈那子
町田 夢子
山脇 貴久恵

17:40頃

阿吽の龍

墨絵師 阿部 朱華羅
能楽師 武田 宗典

17:55頃

月天茶会図

茶師 忌部 孔人
墨絵師 阿部 朱華羅
能楽師 武田 宗典

18:10頃

敦盛

琵琶奏者 馬場 一嘉

清談茶会

茶の湯に込められた思いと美しさ、流派や形式にとらわれず、自然・季節の移ろい、精神的側面、不完全さを尊びながら、茶のこころの在り方を語ります。産土の恵みを受けながら、神事等で使われる麻製品、また霊草・真菰や在来茶の農園を営み、日々の暮らしを彩る品々まで、一つひとつ手仕事で丁寧に紡ぎ出し提供します。

箏のしらべ体験

プロの演奏家の指導のもと、箏の基本的な奏法から、「さくらさくら」などの簡単な曲の演奏を体験頂けます。椅子に座って体験できますので、正座が苦手な方やお子様も大歓迎です。伝統楽器に触れる喜びを気軽に味わえます。

静謐の箏曲

「昇天（竹取物語）」「海の見える街（魔女の宅急便）」「証城寺のスケルツォ」「紅蓮華（鬼滅の刃）」を披露。古典からアニメの名曲まで幅広く取り入れ、伝統楽器・箏の響きが現代の感覚と溶け合う舞台をご堪能ください。

四方被いの儀

千夜賀風による薙刀と刀の試斬は、技の誇示ではなく「被い清める儀式」。徳川將軍家伝来の巴形薙刀、伊達家片倉家に伝わる静形薙刀が舞台に現れ、巴御前・静御前の名を今に響かせます。続いて龍空剣士の刀の試斬、四剣士による四神（青龍・白虎・朱雀・玄武）の被いへ。炎に照らされる真剣の閃きは、神々への奉納であり、礼と祈りを映し出します。

宵の箏曲

「祝宴」「わらべうたメドレー」「編曲砵」など、秋の宵にふさわしい名曲を演奏。若き演奏家たちの瑞々しい響きが、夜気に雅やかな彩りを添えます。箏が紡ぐ旋律は、懐かしさと新しさを同時に感じさせる響き。宵の空気とともに、心地よい余韻をお楽しみください。

『阿吽の龍』墨ライブペイント

墨絵師・阿部朱華羅が、能楽師・武田宗典師の謡とともに3メートルの大布に「阿吽の龍」を描き上げます。「阿」は宇宙の始まり、「吽」は終わりを意味し、二柱の龍は天地を守護する存在。炎と声と墨が重なり合い、守護龍に魂が宿る瞬間をご覧ください。一期一会のライブパフォーマンスをご体感ください。

『月天茶会図』茶×墨絵×能

能舞台を天界に見立てた観月の茶会。能楽師の謡、茶師による献茶、墨絵師の筆が交錯し、舞台そのものが一幅の絵となる新しい舞台芸術です。終幕には献茶が捧げられ、作品は完成。その瞬間は撮影も可能です。祈りと美が交差する、新しい舞台芸術をお楽しみください。

『敦盛』薩摩琵琶

鶴田流薩摩琵琶奏者・馬場一嘉が、源平合戦「一ノ谷の戦い」を題材に、平敦盛最期の場面を弾き語りて語ります。武士のはかなさ、鎮魂の響きに耳を澄ませば、敦盛が愛した笛の音が重なり聴こえてくるかもしれません。祈りを込めた音色に、どうぞ心をゆだねてください。



18:40頃

【仕舞】

高砂 小早川 泰輝
経正 小早川 康充

地謡 武田 文志
佐川 勝貴
松木 崇俊
武田 章志

【狂言】

仏師 大藏 基誠
大藏 康誠

【能】

半能 巴 シテ 武田 宗典
ワキ 大日 方寛

笛 栗林 祐輔
小鼓 大倉 伶士郎
大鼓 佃 良太郎

後見 武田 宗和
武田 友志

地謡 小早川 修
武田 文志
佐川 勝貴
小早川 泰輝
小早川 康充
武田 章志

附祝言

20:00頃 終演予定

仕舞・狂言あらすじ

仕舞「高砂」
住吉明神が悪魔を払い、寿福を招き、千秋万歳を祝して颯爽と舞を舞います。

仕舞「経正」
若くして戦死した平経正の霊が、修羅道に堕ちて戦に苦しむ様を見せ、自分を照らす灯を消して欲しいと僧に頼んで消え失せていきます。

狂言「仏師」
信心深い田舎の者が仏像を求めに都へ登ります。そこへ目をつけた都の詐欺師は自分を仏師と偽り、明日までに仏像を作って渡すと約束をします。翌日、詐欺師は自ら仏像に変装するという大胆な行動で、田舎者を騙そうとするのですが、注文の多い田舎者に苦戦することになります。

『巴』舞台展開

- ワキの登場**
囃子方・地謡方が舞台上に座付くと、「次第（しだい）」というゆったりした囃子に乗って旅の僧侶が現れる。僧は木曾の山深くから京の都へと向かう道中であることを述べ、途中琵琶湖の湖畔である江州粟津ヶ原に立ち寄ったのであった。ワキは座に着くと、巴御前の霊を弔う謡を謡う。
 - シテの登場**
すると「一声（いっせい）」という軽快な囃子のリズムに乗って、甲冑姿で長刀を持った巴御前の霊が現れる。巴は女の身ゆえ、義仲に最期の供を許されなかった。この身は主君への恩で満ちていたのに、共に命を捨てて功名を成すことが出来なかった無念が、執心となって粟津ヶ原に留まっているのであった。
 - 戦いの全容を語る**
シテが舞台中央にやって来て、雙桶という椅子に腰掛けると、巴による戦の回想が始まる。この部分以降、ほとんどの謡は地謡によって描き出される。「五万余騎の大軍で信濃を出発した義仲一行は、砺波山・俱利伽羅峠・志保とうち続いた合戦でも、数えきれないほどの戦功を挙げましたが、それもひとえに、後の世の名誉を思っただけのことでした。しかし、やがて時が移ると運も尽き、義仲は戦に敗れ、まさにこの粟津ヶ原の草の露と消えたのです。お坊様も同郷の方々なので、どうか縁のある身と思ひ、亡き跡を弔って下さい」と、巴は僧に懇願するのであった。
 - 戦の様子を仕舞話に語り、義仲に死の供を許されなかった無念を語る**
「頃は一月。雪が所々に残る道を馬で逃げていた義仲は、薄氷の張る深田に踏み込んでしまい、手綱に縋って馬を鞭を打っても動かなくなってしまいました。私が駆け寄って見ると、義仲は既に重傷。代わりに馬に乗せてこの松原まで供をした私は、自害を勧め、自分も御供を致しますと言いました。しかし義仲は、お前は女だから生き延びる手だてもあろうと、形見の刀と小袖を預けられ、これを故郷の木曾に届けるよう命じられました。もしこの約束に背いたならば、武士としての三世に渡る契りもなかったことになる、と告げられた私は、ただ涙に咽ぶばかりなのでした」
- ☆巴が雙桶に腰掛けている時は、義仲が馬に乗っている様子を表現しています。また舞台正面前方には、横たわった義仲がいると想像してご覧頂くこと、お話を理解しやすくなります。
- 主君の前で最後の奮戦をする巴**
意を決して立ち上がった巴は再び長刀を手に取り、敵の大軍がこちらをめがけて迫って来る様子を伺う。これで主君の為に最後の戦ができると思んだ巴は、恐れられた様子でわざと敵を近づけると、長刀を振り上げ、八方払い・木の葉返しなど、技の限りを尽くして、揚幕の方まで斬り畳んでいく。怖れをなした敵は、遙か遠くへと逃げていくのであった。
 - 主君の亡骸に別れを告げ、一人落ち延びていく**
巴が再び本舞台に戻り、主君の元へ立ち寄り、既にも自害を遂げた後であった。枕の側に置かれていた小袖と守り刀を取り上げ、巴は死骸に別れを告げるが、悲しさに行くも行きかねて、名残を残して振り返る…。とはいえ遺言には背くことは出来ない。巴はしずかに鎧を脱ぎ、刀を解いて烏帽子を脱ぎ捨てると、形見の小袖を身にまとい、刀をその中に抱き隠すと、涙とともにただ一人、木曾へと落ちていくのであった。その執心からの解き放ってほしいと、僧にさらなる甲冑を頼んで、巴は消えていくのであった。

